

「国際浅草学の可能性」

明治大学文学部・教授

井戸田総一郎

「国際浅草学」立ち上げのためのシンポジウムに、このように多くの方々に来て頂き大変うれしく思います。まず、私の方から、「国際浅草学」の発想に至った経緯も含めまして、30分間ほど基調講演をして、それからご招待している各パネラーの方々からそれぞれ10分ほどのメッセージを頂く形でシンポジウムを進行させていただきたいと思います。

2001年から毎年、東京とウィーンで交互に場所を変えて、明治大学・ウィーン大学共同シンポジウムを開催してきました。その総合テーマは『余暇と日常－東京とウィーン』というもので、文学・芸術・芸能・歴史・宗教・社会・風俗などさまざまな領域の専門家に登場してもらい、自由に論を展開することによって、それぞれの専門領域を少し越える学際性・国際性を求めていくことがこのシンポジウムの主旨であります。東京では日本語、ウィーンではドイツ語を会議言語とすることによって、相互の努力で言葉の壁も越えて来ました。ここにおられるリンハルト先生が総合テーマの『余暇と日常』を発案してくださったのですが、これは本当にすばらしいテーマで、さまざまな私たちの身の回りの現象から考えることができますし、それを歴史的に辿っていったり、あるいは構造的に鋭い分析を加えることもでき、これまで明治大学とウィーン大学の双方で4冊の書物を刊行してきました。

私はドイツ文学を専門にしていますが、もともと経済史や社会史を学んだこともあり、文学者としては少し変わった経歴を持っています。来年、ドイツ・ミュンヘンの出版社から『ベルリンと江戸/東京－都市と劇場』という本を、ドイツ語と日本語のバイリンガルで刊行します。それは演劇を単に文学・美学の視点からのみ見るのではなく、興行の視点、つまり劇場立地や経営形態、さらに建築条令関係の問題など、劇場をめぐる社会的仕組みを構造的に分析するものです。そのような方法で、表面的には一見比較できそうもない対

象に、あえて比較の光をあて、当然と思われていることが必ずしも自明ではなく、文化史・文明史のなかで新たな意味を持ち得ることを明らかにすることを目指しています。実は、私の母の方の家系が、1910年代後半から1920年代、関東大震災がおきるまでの大正時代に浅草で全盛を極めた浅草オペラを興行の面で支えた根岸興行部の一族です。今は残念ながら姿を消してしまった六区の常盤座が根岸興行部の拠点でした。私は子供の頃から、何となく芝居は表ではなく幕内の世界がおもしろいのだと耳にしておりましたので、そのような体験も、演劇を興行の面から見る私の傾向を育んだのかもしれませんが。そのような自分史の視点も含めて、私は前々から浅草を学問の対象として本格的に扱うことのできる研究プロジェクトができないものかあれこれ模索を重ねてきました。そして、ここにおられるリンハルト先生と始めたウィーン大学とのシンポジウムが、浅草を日本語ばかりでなくドイツ語でも語ることのできる機会を、しかも毎年定期的に浅草のことを学術的に考える機会を私に得てくれました。毎年浅草のテーマに取り組むことによって、そもそも浅草抜きに東京論を語ることのできないこと、また浅草には文学・歴史学・民俗学などの多様な学問が研究対象にできる題材が多く存在することを心から確信するようになりました。

もちろん、そのように思い付いたからと言って、「国際浅草学」のようなプロジェクトがすぐに立ち上がるわけではありません。昨年、『占領期の日常と余暇』をテーマに明治大学でシンポジウムを開催した際に、明治大学OBの長堀様、河原様、宮本様、植木様のご厚意で、ウィーン大学からの参加者の方々に普段見られない浅草を体験させていただきました。今回このように「国際浅草学」の立ち上げに至る過程では、長堀様や河原様が台東区長を初めとする区の行政に携わる方々と頻繁にお話いただき、この新しいプロジェクトへの期待と夢を育んでいただいたおかげで今日を迎えることができました。この場をかりて心からお礼を申し上げたいと思います。またこの立ち上げを機会に、台東区と明治大学の連携が密なものなり、いろいろな面で協力できることを願っています。

台東区とウィーン市一区はすでに姉妹都市の関係にあります。明治大学とウィーン大学は学生交流を含む包括協定を結んでいます。そして今回、台東区と明治大学は国際浅草学

の振興を中心とした協定に調印しました。このようにして、台東区、ウィーン市及びウィーン大学、そして明治大学の三つの極が固く結びついた訳で、この連携を強い基盤として、「国際浅草学」を展開することを考えています。

今回このように欧米のさまざまな国から著名な日本学の先生方をお招きできたのも、ひとえにリンハルト先生のご尽力によるものです。私一人であれば、このような素晴らしい陣容を組織することは到底無理なことでもあります。ウィーン大学との関係を核にしながら、「浅草学」を真の意味で国際化するために、今後も交流の幅を広げていくつもりです。

さて、「国際浅草学」という言葉を聞いて、さて一体何をするつもりかと皆さん疑問に思っているんじゃないでしょうか。しかし浅草は、私たちのような研究者にとってはとても魅力のある空間なのです。観音信仰の霊場として多くの参拝者をいまなお惹き付けてやまない浅草、今日では残念ながら体験できなくなりましたが隅田川を中心にした水上交通文化の拠点としての浅草、東京の近代化のプロセスのなかで貧困も含めた多様な矛盾を引き受けた浅草、それが故に多くの作家達（谷崎、川端、荷風など）によって文学的実験の場となった浅草、大衆芸能と芸術が混じり合って独特の現象を生み出した浅草、芸能に関係するさまざまな職人芸が発達した浅草、優れた工芸技術を持つ浅草、あげればきりがありませんが、浅草は、文学・芸能・芸術・信仰・工芸・商業・物流・風俗などさまざまな領域が濃密に混じり合って展開している空間なのです。

ところで、新宿や渋谷などのターミナル駅を中心とした地域が1960年代以降急速に発展していくなかで、浅草の衰退が議論されていることも事実です。しかし、銀座、新宿、渋谷などをテーマにする場合でも、浅草は江戸から東京への連続性を生き続けた場として、常に取り上げられねばなりませんし、そもそも浅草を抜きに東京論を展開することは不可能でしょう。浅草を語ることによって、銀座・新宿・渋谷の特徴がむしろ際だってくるのです。浅草は、それほどまでに、歴史のなかで刻み込まれて消えない独特なキャラクター（個性）を保持してきましたし、それは今なお生き続けていると思います。

このような個性が生き続け、しかも浅草には観音様がいますので、別に浅草から強く働

きかけなくとも、人々の方から浅草へやってきてくれることに、私も含めた台東区の方々は慣れてしまっているとは言えないでしょうか。浅草に存在したものの、いま存在するものは私たちにとってあまりにあたりまえになってしまって、その価値について今一度考えてみるのがあまりなくなっているのではないのでしょうか。わたしは決して批判しているわけではありません。浅草には個性あふれる素晴らしいものがありすぎて、逆にそれを外に知らしめる試みが少なかったのではないかと言いたいです。

私はぜひ、海外の優れた研究者の方々に浅草に目を向けてもらいたいと願っています。今回は日本学の先生方をお招きしましたが、将来は日本のことをあまりご存じない著名な世界的な研究者の方々にも来て頂いて、文化論の地平を越える比較文明論の視点から浅草空間の研究対象としてのおもしろさを海外に広めていただきたいと考えています。

私は、浅草にこれまで展開してきたもの、そして今後浅草に展開するであろうものは、アカデミズムのなかでブランド商品のようなものと真剣に考えています。浅草には、端的に言って、できれば外にあまりおっぴらに見せたくないような負の部分、陰の部分があることは自明のことです。しかし、その陰の部分も含めて、浅草空間の底の深さは、国際的に組織された研究にたいへん貢献するものであると確信しています。歴史の豊かな蓄積の上に展開している浅草の多様性を、海外に発信し、世界的な研究者によって認知してもらい、それによって浅草の国内におけるブランド力をさらに一層高めることに貢献したいと思います。

「国際浅草学」が具体的な成果を生むために、私はできる限りのことをするつもりですが、その成否は皆様の支援が得られるかにかかっています。私たちは研究を仕事にしており、大学のなかにできればこもっていたい性質を、程度の差はありますが持っています。私たちはアイデアをだしたり、優れた学者を見つけ出してコンタクトを取り、ここ浅草に連れてくることはできますが、それらを浅草の地にどのように根付かせることができるか、それは皆様の智慧をお借りしなければ一步も進めることはできません。浅草空間そのものが、アカデミズムとこの空間に生きる人々との密接な連携を求めているのです。今日が、

この連携の始まりの日となることを願いつつ、わたしの基調講演を終わらせていただきます。